

# AFTERNOON TEA

## 理学療法と生理学と自分

名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション  
療法学専攻・理学療法学講座

石田 和人

私の専門職は「理学療法士」です。最近の生理学会を覗いてみると、理学療法やリハビリテーションをテーマにしたシンポジウムも多くなり、時代の変遷を感じています。

私が理学療法士の資格を持ち、最初に就職した病院は大学病院でした。今からおよそ30年前のことです。大学病院のスタッフとして、臨床活動のみならず、研究的な活動も行っていました。当時の理学療法士養成課程は3年制の専門学校しがなく、「生理学」という科目はありましたが、その深い学びや研究についての知識はありませんでした。私は、たまたま大学病院に勤めたことを生かし、生理学教室の門を叩くことにしました。当時の私には、生理学の右も左もわからず、ただ悶々としながら、昼間は患者を相手に仕事をし、夜、生理学教室に通いつつ、細々と実験のようなことをコツコツと進めていました。新しい世界に身を投じ、色々な刺激があり楽しい毎日ではありましたが、自分自身が学位を取得して、研究の道へ進むとは夢にも考えておりませんでした。

そんなある日、現在、私が所属している名古屋大学で理学療法教育の4年制大学が設置され、大学院設置も視野に入れていると知りました。そして、こんな（まだ学位もない）私が助手として採用されるに至り、これまでは、夜間細々としかできなかった実験を昼間からできる立場になりました。もちろん、それは新しい苦悩の始まりでもあったわけですが、名古屋大学に赴任当初は生理学教室での研究課題を継続していましたが、その後、脳卒中モデルラットを用いた理学療法に関する研究へとコマを進めました。「理学療法」は、生体に対して何らかの物理的刺激を施して、その生体反

応から治療効果を見出す技術であり、これに「生理学」が深く関わることは認識していました。また、「理学療法」は米国等では、“physical therapy”といえますので、いわば、物理的療法、身体的治療の意味です。また、イギリスなどヨーロッパでは、“physiotherapy”といい、これを直訳すれば、生理（学）療法でしょうか。実は、「理学療法」と「生理学」は切っても切れない関係の分野であることが理解できます。「理学療法」は、いわゆる「リハビリ」と同義と誤解されることが多いですが、そうではなく、物理的刺激を用い、生体の生理学的反応を見出す（脳ところも含めた）身体治療の技術と科学であるという大原則を大切にしたいと考え、病態モデルを用いた理学療法効果に関する研究をこれまで継続してきました。

そして、この春（2017年3月5日）、第26回愛知県理学療法学術大会の大会長を務めさせて頂き、そのテーマを「理学療法の本質と未来予想図」とし、理学療法の本質は生理学であることをアピールしたつもりです。また、1,000名を超える参加者があり、有意義で楽しい学会運営ができました。

私が理学療法士として、生理学教室の門を叩き、現在に至っているわけですが、研究者として、“Nature”、“Science”などといったハイレベルの実績を産むに至ってはならず、研究者としては、まだまだ駆け出し同然ですが、この「理学療法」と「生理学」を大切に、ヒトの身体の不思議を学び、人々の福祉に少しでも貢献できれば、この上ない幸せかと思っております。